東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2008 年 7 月 11 日

アッラーへの恐れで子供を教育すること

親愛なるムスリムの皆様。成人を対象にしたものであれ、子供達を対象にしたものであれ、宗教教育活動においてはまずアッラーについて教えられます。宗教上の全てのテーマは、アッラーへの理解によって形成され、意味を獲得するのです。例えば、人の礼拝への理解は、その人のアッラーへの理解に応じたものとなります。アッラーへの理解を切り離して考えることはできないのです。なぜなら教えの主はアッラーであるからです。そのお方について言及することなく、宗教を説明することがどうしてできるでしょうか。

ただ、ここ数世紀において、伝統的な宗教教育においてアッラーを人々に教えるという点において重大な問題が存在していることが一つの真実です、例えば、アッラーは、愛情、慈悲、慈しみ、許し、保護といった特質以上に、恐れられ、罰を与え、苦しめ、災いを与えるといった観点で説明されているのです。しかしそれがどのような目的で行なわれていようと、アッラーへの恐れのみに集中してアッラーへの認識を形成させようとすることは、よい結果をもたらすものとはなりません。恐怖の対象として語られているアッラーは、心から近しさを感じ、熱い思いで近寄っていく対象となりえるでしょうか。このような教育を受けてしまった子供達や若者は、往々にして、無理に崇拝行為を行なったりアッラーに敬意を示そうとしたりしても、アッラーから遠ざかってしまうのです。

親愛なるムスリムの皆様。特に子供達は、恐怖の焦点として神を認識するにはふさわしくないのです。従って、アッラーを恐れるべき対象として子供達に教えようとすること、アッラーを規律の為の要因と見なすことは、子供達においてアッラーに関する否定的な見方が生じることとなります。「ほら見てごらん、アッラーの怒りで空が鳴り響いている。もしこういうことやああいうことをしたら、アッラーはあなたを地獄に投げ込みあなたを焼いてしまうだろう。」というような形でアッラーを説明していれば、この状況は子供達にいつか神を憎悪させるようになるでしょう。

アッラーではなく預言者が好きだ、という子供にその理由を尋ねると、「だってアッラーには地獄がある。でも預言者にはそれがない。」と答えたことがありました。地震の恐ろしい光景をその父親と見ていた４・５歳の子供は、それを誰がやったのかを訊ね、父がそれを行なったのはアッラーであると言う返事を得ると、次のような反応を見せたのです。「それなら僕も神様の家を壊してやろう！」こういった反応を示す子供達が、このような感情を持っている限り、アッラーを愛し、アッラーに心から結びつくこと、といったような感情はアッラーに対してのみにとどまらず、全ての被造物に対し、愛情の代わりに憎悪、慈しみの変わりに恐れや圧力を感じ、援助を行なう代わりにそれを苦しめ、賞賛する代わりにそれらに罰を与えようとするような心理を形成する可能性があるのです。

親として、特に小さな子供達にアッラーを教える際には、恐れさせるのではなく愛させる方向で行ないましょう。教えに対し反抗的で信仰心のない子供の父母にも、少なくともその子供と同じだけの責任が問われることを忘れないようにしましょう。